

モータージャーナリスト・ノンフィクション作家



IATSS 会員
ドクターヘリでの救急救命医療などを取材。国土交通省をはじめとする各検討委員を務め、ユーザー視点で交通社会、交通政策に対して発言を行う。著書に『東京消防庁 芝消防署 24 時すべては命を守るために』（講談社）など。

早期発見・早期治療が 社会にもたらす成果

ふつうに生活できることのありがたみ

毎日、当たり前のように目覚め、仕事をし、家族と会話をする。そんなふつうの毎日は、実

はとても危うい環境の中にあります。事故にも重大な病気にも遭わずにいられるのは奇跡のようなことで、少し油断をするとあつという間に幸せは手の中からこぼれ落ちていくものだと、ジャーナリストとして交通事故や救命救急センターでの取材をとおして痛感しています。交通事故は、ちよつとした油断が大惨事を引き起こします。

今年（二〇一三年）のはじめ、都内某所にあるマンションから、火災が発生しました。火災の原因は、交通事故。一台の車が、このマンションの一階にある店舗に突っ込んだのです。マンションは、ゆるやかな下り坂でカーブを描いている道の外側に位置していました。車は、このカーブを曲がらずに、そのまま真っすぐにマンションへぶつかったのです。

ふつうなら、ただの損壊ですんだのでしょ

が、あいにくこのマンションは古く、ガス管が建物の外側に付けられていました。車の衝突とともにガス管が破損し、引火して火災が発生したのです。幸いなことに車のドライバーに大きなケガはなく、また、事故発生時刻が夜だったことで店舗にも人がおらず、人的被害は最小限にすんだといえます。しかし店舗は当然、休業を余儀なくされ、その保証は相当なものになると予想できません。

ではなぜ、車のドライバーは、カーブをはずれまっすぐマンションに向かってしまったのでしょうか。ドライバーによると、ふっと意識を失ったとのこと。これが、睡眠不足で睡魔に襲われただけなのか、今回のテーマとなる睡眠時無呼吸症候群なのかは、現在、調査中ですが、こうした事故は頻繁に起こっています。

事故は常に死傷者と隣り合わせ

今回は、本当に幸いなことに負傷者がほとんどない状況でしたが、いつもそうなるとは限りません。カーブをまっすぐ行ってしまった先に対向車がいたり、登校中の小学生の列があつたりするのは、よくニュースなどでも聞く話です。また、もしぶつかった場所に人がいなくても、ドライバー自身や、同乗者にケガをさせることにもつながりかねません。

特に注目すべきは、一般道でシートベルトをしていない後部座席の乗員です。最近の車は、車内空間の広い車の人気が高いため、天井を高くする傾向にあります。すると衝突時に後部座席の乗員が前方に飛んできて前席の人を加害するほか、前席ふたりの間をすり抜けて、フロントウィンドーに頭部から突っ込むということに



頭部に刺さったガラス片を一つ一つピンセットで取り除くドクター



なります。フロントウィンドーにぶつかれば、当然、額や頭部にガラス片が刺さります。現在の日本は、医療技術が向上したといわれています。ですが、カラダに刺さったガラス片は、ドクター

が一つ一つピンセットで取り除く以外に方法はありません。一つ一つです。細かな破片もぜんぶ。そして、たくさんの傷跡が残ります。こうした事態を避ける意味でも、健康管理を含めた事故を起こさない努力をすべきですし、また、後部座席の乗員も、一般道でもシートベルトをしていただきたいと思っています（写真）。

安全運転していても避けられない事故

速度を守る。一時停止をする。左右確認をしつかりと行う……自分で安全運転をしていても、事故は起きます。

昨年（二〇一二年）の七月、江東区にある首都高速、有明ジャンクションで交通事故が起きました。渋滞で停車中のコンテナ車のうしろに止まったワンボックスカーに、トラックを積ん

だキャリアアカーが突っ込み、ワンボックスカーは間にはさまるようになり大破して乗員六人のうち四人が亡くなったという痛ましい事故です。加害車であるキャリアアカーのドライバーは、その後、東京地検が鑑定留置を請求し医師の診断を受けさせたところ、睡眠時無呼吸症候群と確認されたそうです。

もしも、睡眠時無呼吸症候群がもつと注目され、治療を受ける機運が高まり、このドライバーもなんらかの対策を打っていたら、この四人は亡くならずにすんだかもしれない。睡眠時無呼吸症候群に警鐘を鳴らし続けてきた人間から見れば、彼らの死は、プリベンタブル・デス（防ぎえた死）です。今後、二度とこうした事故が起きないようにするためにも、一日も早く、睡眠時無呼吸症候群への対策を行っていく必要があると痛感しています。

睡眠時無呼吸症候群が引き起こす病気

睡眠時無呼吸症候群は、運転中の事故だけでなく、危険な工事現場などでも事故を起こしている可能性もありません。また、睡眠時無呼吸症候群が引き起こす高血圧、糖尿病、狭心症といった病気も、見過ごせない問題です。救命救急学会などでの発表によると、交通事故全体の一・八〜四％は、運転中に意識を失ったから起こしているというデータがあります。また、ドライバーの意識がない場合、本人のケガが重症化するという発表もあります。

自分だけはちがうは、あり得ない

とはいえ、それでもまだ、皆さんの中には「自分だけはちがう」「もし睡眠時無呼吸症候群だ

としても事故など起こさない」と信じ込もうとして
しているのではないでしょうか。たしかに、人間の
脳は、自分にいいことは起こり、悪いことは起
こらないと感じるよう作用するそうです。ゆえに、
宝くじは当たると買って買、自分には絶対に交通事
故は当たらないと思って過ごす。でも、人生の確
率は残念ながら平等です。そして宝くじで一億円当
たるよりも、交通事故に遭う確率のほうが圧倒的に
高いのです。

私はこの数年間、救命救急センターで取材を
続け、多くの交通事故被害者、そのご家族にお
会いしてきました。そして皆さん、異口同音に同
じことをおっしゃいます。「まさか自分がその立
場になるとは思っていなかった」。皆さん、交通
事故に遭おうと思って運転している人は、一人も
いないのです。

予防こそが最大の交通安全につながる

救命救急の世界では、救命の連鎖というものが
あります。早い一・九番通報、早い心肺蘇生、早
いAED、早い二次救命処置。これらがうまくつな
がって人を救います。最近はこれに「予防」とい
う概念が加わりました。救命のためには、まず「
予防」なのです。

睡眠時無呼吸症候群が引き起こす事故。そして
それに付随して起きる病気と事故。これらがなく
し、交通事故でつらい思いをする人が一人でも
いなくなるように、ぜひ、検査、そして治療を
積極的に考え、予防していただきたいと思います。